

量ともに高いもので、いかに武田氏が中世を通じて文化的腐心を行つ

文化遺産にふれて

て来たかが良くわかるところである。この中で、特に禅宗は山梨県

出身僧が、中央で活躍。その資料は今日、わずかに垣間みるにすぎ

なかつたが、世に「妙沢不動」と言われ、大阪市美術館の重要な美術品や、東京国立博物館など、わが国の古美術の殿堂ではいくつか所蔵が見られる龍渕周沢（＝妙沢）の「不動明王図」は、周沢の出身が甲斐武田氏であることを考へると、どこかにあるはずだといつも私の中で宿題のように考へていた画像であった。

一蓮寺調査の折、箱書にある「妙沢不動」の名は私の中で、禅宗と時宗の疑問をいだきながら、驚きを持つて「真蹟であつて欲しい」と、蓋を開けて、軸をひろげたことを思い出す。正に妙沢不動、甲州最初の画僧の出現を見たのである。

この「不動明王図」は江戸時代の奉納に関するものであったが、一蓮寺は武田氏、一条氏の開いた寺で、その由縁であったのであろう。龍渕周沢は天竜寺第十五世になつた人で、京都の禅宗文化の中心にいた僧である。この時代の「不動明王図」の作者としては、先づ妙沢と第一に指を折る画僧が、出自の地に眠つていたことは、私にとって『甲府市史』を担当したという自負と喜びをこの画から与えられたのである。

さて『甲府市史』も完結となる。事務局として多くの御苦労を背負われた高木氏、数野氏はじめとする編纂担当諸氏に深く感謝を申し上げたいと思う。私自身、満足でなかつた多くのことが心残りのままであるが、今後に新たなる「甲府の美術」を肉付けしていくうと思う。

（市史編さんを終えて）

調査協力員 落合四郎

市史編さん調査協力員を引き受けた早六年が過ぎようとしています。この間特別な御協力も出来ず汗顏の至りですが、この大事業に些か関わった者として感銘を深く致しました。磯貝先生を委員長に各専門委員の先生方や事務局の皆様方の一体となつたチームワークに依り、膨大な史料の発掘収集や又その史料の年代別等仕訳の仕事

甲府市制百周年記念事業として計画された市史編さんには調査協力員として参画する機会に恵まれ、金桜神社を始め宮本・能泉・羽黒地区内の旧区有文書等古文書の調査、宮本・能泉・羽黒地区内の石造物調査を担当した。

金峰山を始め多くの山頂の石祠、集落毎に構築された道祖神、路傍の馬頭観音、観音靈場の供養塔、庚申塔、地蔵像、鳥居、石橋、石灯籠等種類と数の多さ、これらを保存して來た先人、地域の人々の情熱に深く頭を下げたい思いがする。

特に山中共古先生が「甲斐の落葉」に甲州で珍しき物と書いた金秋石の石灯籠、荒川ダム東側のダム建設に伴い移転された川窪町内全ての石造物には感激した。

しかし乍ら心ない一部の人には持ち去られたものもあるとか、市史資料を含めこれらの文化遺産を末永く保存することを望みたい。

をなし遂げられて、既に十四巻が発刊されたことあります。そして今春、甲府市制施行百周年記念事業としての甲府市史が完成を見る事が出来ます事は、この上ない甲府市民の喜びと感激ひとしおで御座います。

又石造物調査に致しましても私などは特に関心もありませんでしたが、津金の海岸寺や国立公文書館などの見学等々により石造物に対する興味を起させた様仕向けて下さり、又小沢委員、金丸先生や山田先生並びに事務局の皆様の並々ならぬ御指導により何とかそ^の責任の一端を果せる事が出来ました事を心から感謝申し上げると共に私の生涯の喜びと思う次第で御座います。

(市史編さんを終えて)

調査協力員　植原福貴

調査協力員　樋口光治

武田一丁目法華寺の山門をくぐるとすぐ右側に百体近い無縁仏の石塔が並んでいる。

その中に隨信院殿妙解日純大姉、萬延元年五月十六日没という墓石と、その後方に、妙法淨円院玄覚日悟居士、甲府勤番、小林喜八郎平晨政という墓がある。

戒名からして、かなり名だたる家門の墓であろう。甲府勤番小林喜八郎平晨政之墓というのは、家系が絶えたのか、あるいは江戸へ転勤となつて此處へ残されたのか、何れにしても現在は訪れる人もいない。翻つて、この石造物調査は、このまま放置すれば前記無縁仏も同様、社会から忘れ去られ、散逸し、何処へともなく消滅してしまうおそれのあるものを、何年かけて市内総ての石造物を調査

し、石造物の謄本とも言うべき「甲府の石造物」を刊行された意義は大きい。

祖先の信仰や、種々の伝承の象徴としての石造物が甲府市民の心から風化するのを防ぎ長く生き続けることを強く願うものである。

(市史編さんを終えて)

甲府市が誕生して百年の歳月を経ました。古い城下町から近代都市甲府市の発展の歩みは波瀾もあり災害も幾度か経験した。

つねにたくましい市民性が根源となり市民の愛市努力が市勢進展の礎となって現在の繁栄を創りあげたといつても過言ではあるまい。

産業都市への進展、誇り高い文化の創造、殊に地場産業の研磨工業は国際的に声価をあげている。不幸にも昭和二十年七月の空襲により、市民生活も産業基盤も灰燼に帰した。

併し甲州魂にきたえられた市民は苦しさと貧しさに耐え復興をなし遂げ、更に新しい時代の経済、産業、文化を創造し、現在では全国地方都市でも屈指の位置にまで上つたという。

これを克明に詳述して後世に伝えることが今、世人の大切な役割だと信じる。それは甲府市史編さんの事業であり近く完成されると聞く。この重要な事業(行政)を担当された高木伸也室長(主幹)の完成への貢献に賛詞とスタッフの各位にご苦労様でしたと申し上げます。